

大会関連行事 学生による語り合いのシンポジオン 2007

“設計からまちづくり・都市づくりまで、若者の活力を明日につなげる” 主催 九州支部 シンポジオン実行委員会

1. はじめに

建築やまちづくりを学ぶ学生は、設計を始め、住まいづくりやまちづくりなどの実践にも旺盛なチャレンジ精神で主体的かつ精力的に取り組んでいます。そして多くの人々とのコミュニケーションや熱い議論を欲しています。しかしながら、実務家や市民も多数集まる学会大会において彼らの活動内容や想いを発表する舞台はなく、研究発表の場に限定されているのが実情です。設計やまちづくりは何も研究の次元だけではなく、市民の次元で開かれたスタンスが求められているはずです。

そこで、2002 年度大会(北陸)から大会関連行事として毎年開催してきた「実務・研究・教育の集い」の企画を工夫し、2007 年度大会(九州)では、学生グループの発表と自由討議を基調としたシンポジオン「学内外における学生主体の建築活動(教育・研究・実践)」を開催しました。シンポジオンでは、九州地区内から集まった学生 6 チームが話題を提供し、チーム相互また参加ディスカッサーを交えて自由討議を行いました。学生チームは計画系から構造系まで幅広く話題も多岐にわたり、熱心で刺激的な発表を受けて後半のディスカッションも大いに盛り上がりました。また、シンポジオン後に参加者の方々から意見や感想が寄せられました。

こうした多彩な学生主体の活動について参加者を含め多くの方々に知っていただくため、各チームの取り組みと自由討議の内容ならびに感想をもとに、報告書としてまとめました。



2. 概要とプログラム

会場：福岡大学七隈キャンパス
日時：8月30日(木)15時-17時
発表学生：九州地区の大学、計
6 チーム

参加者：発表学生含めて 60 人

プログラム：15:00～15:05;主旨説明、実施方法説明、～15:41;
各チームの発表(6 分/チーム)、～16:35;自由討議、～17:00;各
チームまとめ・全体のまとめ

3. 各グループの発表と討議

3.1 学生を主体とした建築の保存・再生活動のあり方

—孤風院での足湯制作活動を通して—

：濱田由美(M2)、斎藤みずほ(B4)、山下未紗(B2)、北岡慶子

(B2)；(熊本県立大学・大学院)、増田彩乃(熊本大学 B4)

<プレゼン> 孤風院は、熊本高等工業学校(現、熊本大学工学部)の講堂として 1908 年に竣工した明治の洋風木造建造物であり、1976 年建築家・故木島安史氏が住居として現地に移築再生(リノベーション)し、そこで生活をしながら手を加え続けた。木島氏亡き後も有志らによる「孤風院の会」が中心となって様々

な働きかけや交流活動が続けられている。この孤風院を介した学生たちと地域や職能の面々とのコラボレーション活動の様子、そして、2005 年から取り組まれている足湯の設計から施工に至る詳しいプロセスについて、孤風院や木島氏に対する思いや作業の苦労談を交えて紹介された。

<コメント>・by 三輪真之 木島安史先生は早稲田大学建築学科の先輩ですが、我々後輩の間では「切れ味の鋭い厳しい人」というイメージが強かったように記憶しています。その木島先生が建築物の保存に力を注ぎ続けられ、孤風院を買い取って移築されたという話には感激しました。孤風院のような建築物の保存活動のポイントは「活動のベースとなる愛情がどのように継続されるか」であると思います。そのような観点で今回の「足湯」のプロジェクトを見ると、発意についても実施過程についても展望についても、「何故、足湯か」という論議のレベルを超え、高く評価されるものであると思います。

・by 濱田由美(発表者) シンポジオンでは、他大学の様々な取り組みを見ることができ、その点については大変勉強になったと思います。また、自分達の成果を人前で発表し説明することにより、プロジェクトを客観的に整理し、まとめることで新たに见えることもあり、このような場は大変貴重だと思います。私達のプロジェクトに関して言えば、他大学の学生とお互いのプロジェクトについての情報交換を行えただけではなく、このような機会を通して建築家・故木島安史氏と縁のある方々にめぐり合えたこと、特に現在の孤風院を取り巻く現状について、情報発信を行えたことが最も大きな収穫であったと思います。



完成した孤風院窓湯(田中智之氏撮影)

3.2 『やまさかのまち』での協働活動 ～北九州市八幡東区枝光南地区での取り組みを通じて～

：安部英輝(M2)、橋孝司(M1)、西崎拓郎(B4)、山口祐一朗(B4)、山崎貴幸(B4)；(九州大学・大学院)

<プレゼン> 枝光南地区は旧八幡製鉄所に近接する斜面住宅地だが、製鉄所の合理化や斜面生活の負担から、人口の減少と少子高齢化が進み、空家や空地が増加している。当地区では、2001 年から地元まちづくり協議会と学生らの協働によるまちづくり活動が行われている。「学生が描くまちづくり提案」と題するワークショップで提案されたオーチャードスロープ(果樹の小路)づくりは住民の共感を呼び、住民らによって実行に移された。他にも地域の点検マップづくりなど、学生と住民によるアイデアをもとにデザインし、形にした事例が紹介された。

<コメント>・by 三輪真之 「学生が描くまちづくり提案」という発想に基づく地域活動は、少なくとも、参加者が限られた(しかも、その大半が主婦と老人であるような)「欺瞞的なワ

ークショップ」よりはるかに意義があると思います。今回の提案については、「果樹の小路をつくる」という「客観性も科学的根拠もないコンセプト」が素晴らしいと思います。そして、そのコンセプトを「愚直なまでに」徹底しようとする学生諸君の「執念」がもっと素晴らしい。このようなコンセプトとその展開の仕方は「最も新しいまちづくりの流れ」であると思います。敢えて命名するなら「ロマンが生まれるまちづくり」ということになろうかと思いますが、今回のプレゼンテーションは、「どうすれば地域の住民がその気になるか」という根源的な問題に対する有力な解答になっていると思います。

・by 山崎貴幸(発表者) 枝光南地区での活動に参加したばかりで発表がうまくできませんでしたが、色々な意見をいただき、また、他の大学の活動を知ることができ、たいへん刺激になりました。来年は自分たちが中心になるので、これからの現場での取り組みに活かしていきたいと思います。



地域の方の前で提案のプレゼンと模型展示

3.3 長崎県佐世保市・早岐再生プロジェクト

：大隈愉紀子(B4)、須川瑛(B4)、吉海真歩(B4)、石倉法隆(B3)、戸田卓谷(B3)、福田絵理(B3)、前山慎哉(B3)、増田珠美(B3)、湯村泰介(B3)、嘉野広美(B3)、椎葉哲也(B2)、古川洋(B2)；(九州産業大学)

＜プレゼン＞ 安土桃山時代からの歴史を有する早岐地区において、研究調査を通じて知り合った地元の町内会長さんから住民の高齢化や家屋の老朽化が著しい町の再生案づくりを依頼され、学部学生(2～4年)12人が参加し、町の固有資源を生かした提案を行った。かつて水陸交通の要衝だった瀬戸の急流や400年前から続く茶市を生かし、「そこに行けば誰かいる。そこにいけば誰か来る」をテーマに、水に親しめる環境づくりと浸水害の防止を兼ねた瀬戸からの水路の引き込みや住民と来訪者が交流できる公園を屋上に配した集合住宅の計画など、人が集う空間づくりの提案イメージが紹介された。

＜コメント＞ ・by 三輪真之 地域に密着したプロジェクトでは、特に「地名」の由来について強いこだわりを持って欲しいと思います。例えば、「早岐」は何故「はいき」と読むのか、あるいは、「瀬戸」というのは元々「水の流れが速いところ」という意味の和語ですが、大昔は一体どうなっていたのか、・・・といったことです。そして、そのような追究を通して、イメージを膨らませつつ、現状に至る歴史を辿り、コンセプトの基幹となる言葉を磨いて下さい。これからのまちづくりにおいては「分析力」(帰納的思考)よりも「喚起力」(演繹的思考)が求められると思います。何故なら、いくら優れた分析であっても、分析で人の心は動かないからです。具体的な形にすることを急

がず、「大好きな概念から徹底的な演繹を試みる」という作業をしてみて欲しいと思います。



地域の方の前で提案のプレゼン

3.4 キャンパス内の空地における憩い空間の創造

～企画から竣工まで～

：松本圭史(B2)、鳥辺俊介(B3)、片田江由佳(B2)、坂井麻里(B2)；(福岡大学)

＜プレゼン＞ 福岡大学の建築交流会 ANIX は、建築に対する興味や理解を広げ、深める活動や建築の知的・人的ネットワークの構築に資する活動、見学会、勉強会、講演会などを通じた学内外相互の交流の活性化に取り組んでいる。福岡大の学生チャレンジプロジェクトとして、2006年に工学部の売店前の空地を有効活用し、学生が気持ちよく過ごせる憩いの空間を実際に提案した。段ボール性の三角形ユニットで構成した屋根をもつオープンテラス「anihani」の仕組み、設計から製作までのプロセス、設置後の利用状況の調査などについて紹介された。

＜コメント＞ ・by 三輪真之 空間や形態にいくつかのタイプがあるともっと魅力的な提案になっていたとは思いますが、「殺風景な空間をものづくりで解決する」というコンセプト、「とどまる」というキーワード、オーソドックスな作業の流れがよく分かるプレゼンテーション、・・・など、学生のレベルとしては、高く評価したい点の多いプロジェクトだと思います。勿論、通常の課題以外のプロジェクトですから、注ぎ得るエネルギーに制約はあるかと思いますが、今後も「徹底」・「密度」・「洗練」といったことを意識して、「一つの試みが次の取り組みにつながるような取り組み方」を心掛けて欲しいと思います。



空地を活用した憩いの空間づくり

3.5 『Kyushu Landscape League』

：坂口浩昭(福岡大大学院 M2)、遠山浩由、増山晃太(両人は熊本大大学院)、許斐信亮(九州大大学院)；(九州デザインシャレット)

＜プレゼン＞ Kyushu Landscape League(略称 KL2)は2001年に結成された学生やOB/OGたちのネットワークで、自分たちの思い描く九州を語り合い、九州の風景を共に大切に手づくりしていくためのツナガリを広げていくことを目的に活動している。

2005年からKYUSHU DESIGN CHARRETTEを運営し、九州各地区で土木、建築、造園、都市計画などを学ぶ学生たちがひとつの場(2005年:佐賀県唐津市、2006年:熊本県宇城市三角町)に結集し、地域空間のデザインをテーマに専門家や学生同士、地元住民との議論や、分野を超えたコラボレーションを展開する取り組みを重ねている。その経緯と活動の様子、現在の課題が紹介された。

＜コメント＞ ・by 三輪真之 若い人達が、「地域密着型の設計演習」をベースとした「九州デザインシャレット」という「建築運動」を進めていることに感動しました。建築に限らず「運動」には、大きなエネルギーが必要です。発表されたプロジェクトからは、デザインについてもマネジメントについても「剛腕」という印象を受けました。遠い先のことを考え過ぎず、「現在」にベストを尽くして頑張ってください。

・by 坂口浩昭(発表者) プレゼンでは、KL2について発足経緯から今日抱える課題を整理し、中でもKYUSHU DESIGN CHARRETTEの取り組みを詳しく説明した。地域にまちづくりのキッカケとなるイベントを行ったわけだが、今後もその町にどう関わっていくのかなどが課題である。本年度も門司港で開催予定であり、地域貢献と学生による学生のためのイベントとして更なる飛躍をめざして今後も活動を頑張っていく必要がある。討議では、たくさんの方に興味を持っていただいた。KYUSHU DESIGN CHARRETTEの主旨や目的などについて質問が多く、建築分野の方には、まだまだ広報が足りないなと感じた。やはりプレゼンでも述べたような、イベントを行った町に、その後どう関わっていくのか、KL2を金銭面や人材面でどう続けていくのかについての質問が多かった。頑張ってくださいとの言葉や参加したいなどの言葉が何より励みになった。個人の感想として、自分と同じ立場である学生の方々が頑張っていることを知り、大変刺激を受けた。また、学生による活動は活発であるにもかかわらず、今回のような成果を発表する場が少ないと感じる。今回のような場が、単発で終わるのではなく自然発生的に全国で多発することを切に願います。また、ここで培われたネットワークを大切にしていきたいと思う。



KYUSHU DESIGN CHARRETTE 最終発表会の様子

3.6 SRB-DUP 構造を用いた小規模講義棟の建築

～リユース可能レンガで実際に建ててみる～

：副島正成(M2), 渋谷龍典(M2), 田畑早也香(M2) ; (九州大学大学院)

＜プレゼン＞ 大学院授業で実施された循環型建築の設計から実際の建築化までを行うユニークな演習プログラムである。再利用可能な乾式レンガ造である SRB-DUP 構造を用いた小規模講義棟の設計・建築を目的に、受講生13人がワークショップ形式

で共同設計を行い、実施案を決めた後に施工計画をつくり、施工作業を行った。当授業では、学生が一貫して主体的に取り組み、教員や工務店のサポートを得ながら、ひとつの建物を完成させた。授業の様子、特にモノづくりのプロセスがビデオを用いて詳しく紹介され、また、SRB-DUP 構造のオリジナリティについての解説も加えられた。

＜コメント＞ ・by 三輪真之 規模の大小や工法の特徴がどうであるかといったことを云々する以前に、具体的なコンセプトの下に「企画」・「設計」・「施工」という一連の建築行為が全て実際に体験できるということは、それだけでも素晴らしいことです。プレゼンテーションにはその喜びが満ち溢れているように感じられ、見ている者までが幸せな気分になせられたと思います。ただ、全ての建築行為が「明確な意図に基づいてなされる行為」である以上、今回の試みについて、「個々のメンバーが体験として得たもの」とは別の例えば「回りの人達に伝えたかったメッセージ」といったものを明確に示して欲しかった気がします。



小規模講義棟の完成披露

4. 教員側・社会人側の声

4.1 三輪真之(計画哲学研究所)

今後について。ネーミング案：「学生の志を育む建築シンポジオン」、主旨：原則として学部学生の自主活動を対象とし、学生のプレゼンテーションに対して、実務者・研究者・教育者が「学生の志を育む」という立場でコメントする。(学生相互の交流も重視し、大学の講評会とは一味も二味も違う会にしたい)

4.2 井山哲雄(鹿島建設)

今回の討議で感じたことは、今の学生は我々の学生時代以上に積極的であり、数々の情報のツールや情報網をもっていること、異文化の学生とのコミュニケーションを図っていること。その中で自由討議し、纏め上げる能力を持っていることを感じた。逆に言うと、彼らをもっと伸ばせるような教育の場、実践の場を提供していくことが必要と思われる。今回6件の発表があった。その中には、自分たちで計画し、実際にものづくりを行い、それを使ってみた感想までを発表したチームがあった反面、一方では、計画のみで完了し、また次の計画に行くというチームもあった。計画を行なうというのは大事であるが、それはあくまでも第一歩である。できれば計画を一部でも実行させ、物を作ることの面白さ、むずかしさ、それを改良することへの更なる発展を期待したい。

5. まとめ(by 世話人 志賀勉)

とにかく圧倒されました。今回の場づくりはまさにぶっつけ本番でしたが、学生チームそれぞれのユニークな活動が工夫を

凝らしてプレゼンテーションされ、活発なディスカッションへとつながりました。

私自身たくさんの収穫がありました。第一に、九州地区において大学や分野を超えた学生のネットワークとコラボレーションが進んでいることを遅ればせながら知ったこと。第二に、学生の主体的な働きかけに対する現場の期待感と実践機会の高まりを再認識したこと。第三に、学生の実践活動を有意義なものとするための課題として、提案をモノにする状況づくりや体制づくりの重要性とそれに対する私たちのさらなる努力の必要性を確認したことです。

今回のシンポジオンを通じて参加者それぞれに得られたことが、今後の取り組みに活かされることを願っています。